Habitat for Humanity® Japan

HFHJ Newsletter

ハビタット・ジャパン　ニュースレター

第６号　２００７年３月発行

フロリダでLearn & Build！新ボランティアプログラム実施報告

アメリカ出張中、ハビタット・アフィリエートの役員であるJohn Finnertyさんと話をしたことがきっかけで始まったこの企画、いろいろな方の助けを得ながら、約２週間の日程（２月16日から３月４日）を無事に終えました。建築活動やコミュニティサービスを通して、アメリカの文化やボランティア精神を体験的に学ぶという新しい試みは、果たして成功したのでしょうか。

親善大使チーム？

Learn & Buildチームは、男性の参加者がキャンセルしてしまったため、女子大生５人というチーム編成になりましたが、それがかえってチームの結束を高める結果になったようです。日米両国のハビタットオフィスでのインターン経験があり、プログラムの立ち上げから関わってくれた寺田茉莉子さんをチームリーダーに、江木和佳子さん、小笠原加奈さん、田口恵理さん、渡辺友紀子さんが初代チームメンバーとして大活躍してきてくれました。

チームを受け入れてくれたのはフロリダ中部のEast Pascoというコミュニティです。海外からのチームを受け入れたのはこれが初めてで、地元でも大きな話題になりました。受け入れに際しては、East PascoハビタットのMatt Hillanさんが献身的に準備に奔走してくださり、また現地ではGlen Wilkinsonさんと Sharon Wilkinsonさんご夫妻が付きっきりでチームをサポートしてくれました。

現地での歓迎ぶりは大変なもので、この５人のメンバーは親善大使のような役割も果たしました。新聞の取材を受けたり、イベントに参加したり、商工会議所の朝食会やホッケーの試合に招かれたりと、East Pascoハビタットの広報に大きく貢献し、コミュニティのモチベーションを大いに高めました。

また彼女たちも、滞在していた大学のカフェテリアでの食事代を免除してもらったり、ディズニーワールドのパスをプレゼントされたり、頻繁に食事に招かれたりと、十分なお返しを受けました。

釘打ち名人！

建築現場で彼女たちが主に任されたのは釘打ちとドアのペンキ塗りです。残念ながら屋根の梁をわたすといったような作業は危険なためできなかったのですが、写真のとおり、立派に貢献してくれました。ちなみに取材にきた記者のメモには「釘打ち名人」と書かれていたそうです。

またLearn & Buildチームと同じ時期にはCare-A-Vanner（キャンピングカーでアメリカ各地の建築活動に参加するボランティアグループ）も参加しており、ボランティア同士の友情も芽生えました。

「ボランティアをすることは普通のことなのよ」

East Pascoはボランティアが盛んなコミュニティで、ハビタットの活動も根付いています。住民が自然な形でボランティアに関わっていることに、メンバーは日本との違いを感じたようです。「ボランティアをするのは普通のことなのよ」という現地の人の言葉は、実感を持ってメンバーに受けとめられました。実はそれが今回のチームに一番学んで欲しかったことであり、その意味でLearn & Buildは成功だったといえます。

「してあげる」と「してもらう」

メンバーはあまりにも現地の人が親切なので「助けにきたのに、逆に世話を焼いてもらって申し訳ない」と感じたりもしたようです。でもフロリダの人たちは「わざわざ日本から自分たちを助けに来てくれたのだから、できるだけのことをしてあげたい」と考えていました。「してあげる」と「してもらう」が逆転するのはボランティアプログラムではよくあることです。

メンバーが助けた人たちは、また別の人たちを助けるでしょう。日本やアジアを身近に感じるようになった人たちは、アジアで貧困住宅に苦しんでいる人たちを助けるようになるかもしれません。そしてフロリダの人たちの愛情と善意を十分に受けたメンバーは、他の人を助けていくに違いありません。貧困の連鎖を断ち切り、このような善の連鎖を生み出していくのがハビタットです。

最後に参加者の募集に関しては、明治学院大学ハビタットの皆さんに多大なご協力をいただきました。どうもありがとうございました。

（事業部ディレクター・三村　紀美子）

近況報告　HFHJ アップデート
Japan Update

インドネシア、ジャカルタ大洪水被災者支援

１月末から２月初めの洪水により一夜にしてインドネシアの首都ジャカルタの低地の部分が水につかりました。同国のメディアが伝えるところによると、約10万の家屋、約29万人がこの洪水により被害にあい、ジャカルタの38地区、ベカシ州の11地区という広大な地域にわたる被害となりました。ほぼ一カ月たった３月上旬現在でも多くの人が泥に覆われた家に住んでいます。

去る２月17日、ハビタット・インドネシアでは活動の手始めとして、北部ジャカルタと北部ベカシの５家族を対象に家屋の修繕活動を行いました。ボランティアたちは床を覆っている泥をかきだし、きれいにし、壁や屋根の修繕を行いました。他団体の協力により、無料の医療相談や治療も行うことができました。

ハビタット・インドネシアでは引き続き向こう３カ月間で特に被害をうけた貧困層の1,000家族への支援を行う計画です。修繕の予算は１軒あたり約14,000円程度ですが、貧しい家族は壊れた家を修繕することもできません。屋根がない家族などは不安にかられており、早い支援が必要です。床や屋根など家屋の修繕を共に行い、通常の生活ができる状態にいち早く戻るように手助けをしていきます。皆様のご支援をお願いします。

（国際事業部）

ルーマニアGV 報告
（青山学院大学 本間正史）

まずはじめに全てのことをひとことで言うと、最高でした。２年間ハビタットに関わってきてはじめてのグローバルヴィレッジ（ＧＶ）だったこともあったせいか、最終日のワークが終わった時は達成感と寂しさでいっぱいでした。

チームリーダーとしてルーマニアＧＶに参加して感じた反省としては、事前準備から現地活動にいたるまで一人で多くの仕事をしてしまったことでした。リーダーとしてチームを率いる時、大切なのは１人で10のことをやるよりも、５人で２ずつやるということだと感じました。このほうがずっと効率が良いし、団結したチームといえると思いました。

またよかったと思う面も多くありました。１つ目は、ＧＶを通じてメンバーと今まで以上に色々な話をして人間を知ることができた、そして今後サークルを作っていく（今回のメンバーを中心に、ＣＣとは別の、ボランティアや社会活動を行うグループ）にあたって、お互いの考えをしっかり共有できたことです。２つ目に、メンバーのほとんどが「このＧＶに参加できてよかった」と口にしてくれたことでした。決心して頑張ってきた甲斐があったと感じると同時に、皆が楽しく活動している姿を見ると楽しかったです。３つ目に、事前準備から現地での活動を通して、数え切れないことを学べました。特に現地スタッフとの英語でのコミュニケーションは緊張もしましたし、プレッシャーでもありました。しかし終わってみると、良い経験として自信につながりました。

僕たちが行った町、ベイユーシュはメンバーが想像していたよりも貧困を感じさせない場所でした。また、経験がなかったせいかもしれませんが、建築作業とは大変なことだと改めて思いました。現場では人手が不足していると感じましたし、ホームオーナーはスウェットエクイティで1,000時間の労働をすることを知りました。

最後に、センディングコーディネーターの中川ミミさんとホストアフィリエートで予算や計画を共に練っていただいたエミール・バーナさんにお礼を申し上げたいと思います。半年間でしたが、共に活動できてとてもたのしかったです。そして物事をすべて円滑に運べたのも、ミミさん、エミールさんがいたからだと思います。本当にありがとうございました。またこういった機会を持てることを楽しみにしています。

（編集部注：ルーマニアＧＶは２月19日～28日までの10日間、本間正史君をリーダーに、11名が参加して実施されました。）

ＨＦＨと国連ハビタットの連携

ハビタット･フォー･ヒューマニティ（ＨＦＨ）と国連ハビタット（国際連合人間居住計画）は、2004年９月15日にバルセロナで開かれた第２回世界都市フォーラムにおいて、都市における貧困および世界各地で発生する紛争・災害からの復興等の問題に共同で取り組むことを決定し、正式に提携協定を結びました。本稿ではその後の成果についてリポートします。

国連事務次長で国連ハビタット事務局長のアンナ・ティバイジュカ氏は、調印式において「この協力は2015年までに貧困に苦しむ人の数を半減させるという国連のミレニアム開発目標の達成と、スラムに住む人たちの生活環境の改善にとって重要な一歩になる」と述べました。

ＨＦＨと国連ハビタットは、劣悪な住環境から人々を解放する国際機関としてのミッションでだけでなく、似たような団体名や創立の時期、国際社会での共通の役割を持っていることで互いに混同されてきました。しかしこれからは、違いを説明し続けるよりむしろ、共通のゴールに向けて協力することを選んだのです。協定が締結されて以来、ＨＦＨと国連ハビタットはこの連携をより強化する方法を検討してきました。以下はこれまでに両団体が連携して行った事業です。

UNハビタット事務局長 アンナ･ティバイジュカ氏と、HFHIトム･ジョーンズ（調印式にて）

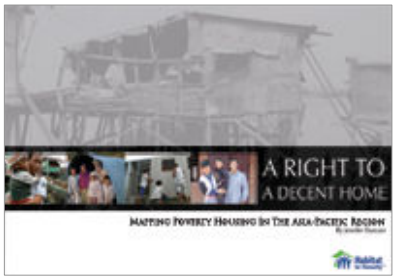
アドボカシー（啓発活動）：
＊10月３日、世界ハビタットデーでの各種行事
＊第３回世界都市フォーラムでのＨＦＨ創立30周年記念関連プレゼンテーション

災害復興活動：
＊パキスタン北部地震
＊インド洋津波
＊ハリケーン「カトリナ」

（ＨＦＨの機関紙「The Forum」Vol.13-No.4より抜粋）

イベント＆プロジェクト
Event and Project

貧困問題に関する報告書を発表



ハビタット・フォー・ヒューマニティはこのほど、貧困問題に関する新しい報告書『きちんとした住宅への権利―アジア太平洋地域における貧困住宅の現状（A Rights to a Decent Home － Mapping Poverty Housing in the Asia-Pacific Region）』（Ａ４横版、110頁、英文＝**写真**）を発表しました。ハビタットの委託によるこの調査研究は、一般的な貧困に関して広く認められている広範な出版物の中から集められた統計と研究をひとつの文書にまとめた初めての成果です。報告書にはハビタット・フォー・ヒューマニティを含むいくつかの組織によって現在行われている、将来性のあるプロジェクトについての事例研究も含まれています。また、農村部と都市部の貧困住宅の多くの原因と結果、新興する経済に対する影響などを明らかにしています。

今回の報告書には、さらなる研究のための豊富な脚注と参照文献が収められており、都市プランナーや政策立案者、開発組織、援助機関、シェルター専門家やその他、アジア太平洋地域の住宅状況に関心をもつ人々にとって貴重な情報源となるでしょう。

報告書はhttp://www.habitat.org/AP/からダウンロードすることができます。ぜひご覧ください。　（広報部）

ハビタット交流会が開かれました

昨年12月２日、中野区立商工会館にてハビタット・ジャパン主催による交流会が行われました。当日は会員や理事、キャンパスチャプター/クラブの学生メンバー、GVボランティアなど総勢45名が集まり「普段は顔をあわせない人同士のふれあい」が実現しました。ご参加くださったみなさま、ありがとうございました。スタッフ一同、ハビタットをいつも支えてくださっているサポーターの皆様とお会いし、ようやく感謝をお伝えすることができたことを喜んでおります。また多くの方がハビタットを通してつながっていることを再認識し、励まされるとともに、襟を正すよい機会になりました。今後もこのような機会を持ちたいと考えておりますので、その際にはよろしくお願いいたします。

グッズをつけて、ハビタットを広げよう！

アメリカのハビタット本部からやってきたハビタット・グッズを取り揃えております。ご希望の方は事務局までお問い合わせ下さい。左からホワイトエナメルピン、シルバーピン、キーリング。

チャリティイベント「BANGLA」報告

昨年12月16日、関東キャンパスチャプター(CC)３大学が合同主催するバングラデシュ支援チャリティーイベント『BANGLA ～Build A Next Gratified Life And…～』がPolygon表参道で行われました。当日、会場は281名の来場者で埋め尽くされ、同時開催をしていた街頭募金も含め、約60万円の寄付金が集まりました。

２人に１人が家を持てない現実

１年前、CCの親睦を目的としてイベント企画が発案されたことがこの日の発端でした。ミーティングを重ねるにつれ、２人に１人が家を持てないという現状を抱えるバングラデシュを支援できるものにしようと企画が固まりました。手探り状態で企画書を更新し続け、まず私達自身バングラデシュを知ること、関連の催物への参加や支援団体へのアプローチ、バングラデシュ大使との対談、また実際にGVで現地を訪れ見識を深めるとともに、販売品の購入、写真や映像の撮影を行いました。人々が抱いているバングラデシュへのイメージを調査し、私達が伝えたい現実をいかに表現するか。ゲストや会場探し、フライヤー作成、東京新聞を始めとするメディアへの広報。人を惹きつけること、一過性で終わらせないことを念頭におこう…。メンバーのモチベーション向上や情報共有の難しさ、規模拡大に伴うプレッシャーを感じながら、リハーサルや打ち合せを重ね、当日を迎えたのでした。

ＣＣの枠を超えて繋がるきっかけに

「私も何かしなくちゃと心が動かされた」というお客様、「大変だったが貴重な経験となった」というメンバー、「イベントに参加させてくれてありがとう」というゲスト、人数や寄付金の額ではなく一人ひとりにとって温かい想いが残るイベントになったことを嬉しく思います。細切れのように感じていた私たちの存在が、一連の活動を通じCCの枠を超えて繋がるきっかけとなったことも大きな収穫でした。

今春に予定していたバングラデシュGVは治安情勢悪化のため中止となり、現地に赴くことはできなくなってしまいましたが、イベントに寄せられた想いをバングラデシュに届け、また完成した現地のハビタットハウスの報告を伝えることで、ご協力いただいた多くの方々への感謝の気持ちを表したいと思います。　（青山学院大学SHANTI SHANTI 奥村亜希乃）

近況報告 HFHJ アップデート Japan Update

Volunteer Voice

オフィスで私たちスタッフを支えてくれるインターン。ここでは海外のハビタットオフィスへ行く予定、もしくは活動中の３人をご紹介します！

Q）あなたにとってボランティアとは何ですか？

M：マイケル・ラーソン君（Dartmouth Univ.）一言でいうと、単にお金をもらわずに働くということ。でもボランティアでしか得られない貴重な経験や技術など目に見えるもの意外でも得られるものがあるし、お金をもらう以上に意味があることだと思う。

K：清水慶子さん（早稲田大学）自己実現の一つ。

O：奥村真知子さん（津田塾大学）小学生の頃、授業の一環で「ボランティア」をしましたが、今になってみると本当のボランティアとはあくまで「自分の意思で」行うものだと思います。

マイケル・ラーソン君

Q）不安や期待はあります（した）か？

M：自分がどんな経験をするかは結局自分しだいだと思う。東京のような大都市では、アメリカにいるのと似たような生活ができる。でも一歩踏み出せば、その国の言葉を学ぶことも文化に触れることもできる。自分が働きかければ、周りの人たちも助けてくれるはず。

K：インターン先がタイなので…不安はコミュニケーション、体調管理、パクチー(香菜、東南アジアでよく食べられる食材)をどう調理するかなどなど…。

O：(英語であっても)現地の人が強いなまりで話す場合、まったく何を言っているのかわからない可能性もある。期待は事前にあまり膨らませずに行って、とにかく向こうの人の懐に入っていけるように努力し、結果、予想外の出会いや収穫があればいいな。

清水 慶子さん

Q）同世代や、海外ボランティアを計画中の人たちへひとこと。

M：海外でボランティアをするということは、特に若い世代の人たちのように社会の変化を担う力となる世代にとってとても良い経験になると思う。他では得られないような経験を通じて自分の視野を広げつつ、社会の役に立つことができるのだから。

K：動くこと！　思ったことを誰かに話した時点で、すべてが回りだします。動けばどんどん面白くなっていくから。自分に正直に！

O：とりあえず始めてみることが大きな一歩だと思います。わたしはボランティアの過程で自分なりの課題を見つけ、もがいてみなければいけないと思っています。

奥村 真知子さん

それぞれの道で成長し、またHFHJに戻ってくる日を楽しみにしています！★オフィスボランティアも募集中★

寄付・助成リスト（2006/11～2007/2）

みなさまのご支援を「誰もがきちんとした場所で暮らせる世界」の実現のために使わせていただきます。

日付	寄付者名	支援国指定	金額
11月24日	京都外国語大学	パキスタン	80,189
12月13日	西那須野幼稚園園児・職員一同	フィリピン・レイテ	30,000
1月4日	横浜ユニオン教会		54,700
1月12日	BANGLAイベント収益金	バングラデシュ	614,711
2月2日	兵庫JET		5,250
2月26日	ウダアキオ	インドネシア	50,000

本当にありがとうございました。（敬称略）

寄付支援は下記の口座にお願いいたします。

郵便振替口座：

口座番号:	00100-2-278431
口座名義:	(特活) HFH ジャパン

銀行口座：

振込先:	三井住友銀行　中野坂上支店 Sumitomo Mitsui Banking Corporation, Nakanosakaue Branch,
口座番号:	普通４１８０７３８
口座名義:	トクヒ) ハビタット フォー ヒューマニティ ジャパン

※義援金、一般寄付など寄付の使途をご指定ください。

Habitat for Humanity® Japan

ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパンは地域のニーズに基づいたプログラムや個人参加を通して世界中の貧困住宅の撲滅を目指しています。2006年は100以上の国々で、100万人近くのボランティアが参加しました。私たちのエキサイティングな活動に関するさらなる情報をご希望の方はぜひ下記あてご連絡ください！

Habitat for Humanity Japan

〒164-0003
東京都中野区東中野1-45-5　Tel: 03-5330-5571
日ノ出ビルB101　Fax: 03-5330-5572
発行人：塚本　俊也　URL: www.HabitatJP.org
編集人：茂木　周二　Mail: info@HabitatJP.org
同　：中川　ミミ